

【平成 16 年度倫理学専攻講演会講演要旨】

気枯れ社会の実感宗教

西山 茂

*本稿は、平成 16 年度国士館大学倫理学専攻講演会（平成 16 年 12 月 18 日実施）の際に作成したレジュメをもとにして、まとめたものである。

1. 2つのキーワード

最初に、この講義の主題を構成している 2 つのキーワードについて解説する。その第一は「気枯れ社会」である。これは生命エネルギー（気）が弱まった社会、生きる実感性を喪失した社会を意味する。具体的には、元気がない、ヤル気が起こらない、空しい、メリハリが感じられないような社会をいう。その第二は「実感宗教」であるが、これは口と耳を重視する「言葉の宗教」（聞法宗教・信の宗教）ではなく、修行と身体を重視する「感じる宗教」（体感宗教・術の宗教）のことをいう。

2. 3つのまえおき

一つ目のまえおきは、日本が日露戦争後（明治末・大正期）と第一次石油危機（1973 年）後の 2 回、「国策としての近代化」の一段落期を迎えたということである。そして、日本は、前者の時に透視術（千里眼）ブームを、後者の時に超能力（スプーン曲げ）ブームを経験した。さらに、これらの時期には、ともに、こうしたブームを追い風にして「実感宗教」が台頭してきた。

二つ目のまえおきは、イソップ物語の「アリ」と「キリギリス」の話である。いうまでもなく、「アリ」は勤勉・禁欲を旨とし、今日を犠牲にしても明日のために貯金する「あした主義者」のことである。国の「近代化」や個人の「成功」を達成するためには「アリ」の生き方が必要である。これに対して、「キリギリス」は享楽・即時満足を旨とし、明日よりも今ここで人生を享楽しようとする「現在主義者」のことである。「近代化」後の「豊かな社会」では、総じて、若者を中心に「キリギリス」の生き方が好まれる。そして、この「キリギリス」が、やがて、「実感宗教」の有力な担い手として注目され

るようになる。

三つ目のまえおきはネパール僻地の子供たちの眼の輝きの話である。私的な体験によると、子供たちの眼の輝き度合いは、ネパール僻地＞カトマンズ＞バンコク＞東京の順であった。つまり、近代化・都市化が進展していない地域の子供たちの眼ほど輝いていたということである。経済的に最も豊かな東京の子供たちの眼の輝きが最低であったということは、経済的な豊かさがややもすると「心の貧しさ」を招来するということである。事実、若者たちの無気力・無感動（アパシー）は日本だけの現象ではなく、高度産業社会に共通の現象となっている。そして、このような「心の貧しさ」は、「実感宗教」の台頭を促す重要な要因として注目される。

3. 戦後日本の新宗教運動

以上の事柄をふまえて日本の戦後史を振り返ると、戦後史の「分水嶺」が第一次石油危機を経験した1973年であったことがわかる。この年に高度経済成長は終焉したが、同時に、日本社会は「豊かな社会」の門口に立った。それ以前を「第二の近代化」の途上期とすれば、それ以後は門口を含めて「豊かな社会」の時期である。途上期は「生活の貧しさ」を焦点とする「アリ」の時代、「豊かな社会」は「心の貧しさ」がクローズアップされる「ギリギリス」の時代であった（ある）ともいえる。

こうした「分水嶺」をにらみつつ、日本の戦後史を4段階に分け、新宗教の発展を促すと思われる段階ごとの問題の特徴を概観すると、以下のようになる。

第一期 戦後復興期（1945－1956）（焦点）絶対的窮乏と急性アノミー

空襲による一面の焼け野原からの再出発

生命の再生産の限界線以下の貧乏／価値規範枠組の急激な崩壊

第二期 経済発展期（1956－1973）（焦点）根こぎと相対的不遇感

「第二の近代化」の真っ最中 → 世界中が驚くほどの経済発展

離村向都による文化的不適応／経済的全般的底上げからの脱落と不満

第三期 繁栄享受期（1973－1989）（焦点）気枯れと閉塞（新たな貧困）

曲がりなりにも「豊かな社会」を達成

衣食足った上での無気力・実感性の喪失・定め難く持て余す自己

木下藤吉郎なき定常社会（閉塞） → 短絡的突破志向のたかまり

気枯れ社会の実感宗教（西山）

第四期 ポスト冷戦期（1989－）（焦点）不測と終末感（観ではない）

低経済成長と冷戦体制・戦後体制の崩壊と再編成

ベルリンの壁崩壊 → 冷戦終結 → 局地的民族紛争とテロ（世界の混沌化）

「大きな物語」（包括的イデオロギー）の喪失 → 海図なき航海（不測）

悲観的な未来予測 → 終末感の蔓延（ノストラダムスの大予言など）

次に、上記の各段階に照応して展開してきた新宗教運動の特徴を紹介する。

第一期（戦後復興期）の新宗教運動の特徴

雨後の筍のように新宗教が乱立した時期、生活の匂いのする新宗教の発展

のつびきならない悩み事の現世利益的な解決と新たな生活規律の提供

中心的な担い手は中年主婦（「アリ」、生活のど真ん中、矛盾が集中）

第二期（経済発展期）の新宗教運動の特徴

新宗教が衰退するものと発展するものに分かれた時代

大教団化した新宗教は途中でマスコミ・世論の集中攻撃を受けて方向転換

以後、「脱呪術的合理化」を遂行して時代社会に適応したが教勢は停滞

第三期（繁栄享受期）の新宗教運動の特徴

第一次石油危機（1973）と高度経済成長の終焉 → 「豊かな社会」の門口

量から質へ／理性から感性へ／合理主義から非合理主義へ

ユリ・ゲラーのスプーン曲げ → 神秘・呪術ブーム → 「新々宗教」の台頭

「霊術」重視の「新々宗教」＝「感じる宗教」（縛りの弱さも強調）

その中心的な担い手は「キリギリス」＝「教団嫌いの神秘好き」の若者

第四期（ポスト冷戦期）の新宗教運動の特徴

「霊術」とともに「終末」と「メシア」を強調する新々宗教が台頭

自作自演の「ハルマゲドン」（終末）と教祖＝メシア（キリスト）論

武力を許す「ヴァジラヤーナ」の思想＝「アブナイ宗教」の出現

以上、戦後日本の新宗教運動の特徴を段階ごとにみてきたが、前述したように1973年の「分水嶺」を境に、新宗教が「現世利益から超常体験へ」または「呪術から神秘主義へ」と強調点をシフトし、その担い手も生活の中心にいる中年主婦（「アリ」）から生活実感を伴わない若者（「キリギリス」）へと移行していることがわかった。

4. 「キリギリスの悩み」

現代日本の若者たちは、「豊かな社会」のなかで空しさと無気力に苦しめら

気枯れ社会の実感宗教（西山）

れ、定め難い自己を持て余している。このような悩みは、日本人がかつて経験したことのない新しい悩みであり、考え方によっては生活上の悩みよりも深刻であるかも知れない。その意味で、彼らは大変な時代を生きているといえることができる。現代の若者たちは、空しさと無気力に苦しみながら、真に「感じられる」ものを求めて彷徨している。彼らは「感じたい症候群」にかかっているともしえる。

「生活の豊かさ」が「心の貧しさ」を生むのであれば、生活は貧しいほうがいいのであろうか。いったい、「何のための豊かさ」（D. リースマン）なのであろうか。「豊かな社会」の人間は、このような大きな戸惑いに直面しているが、いったい、その解決法は奈辺にあるのであろうか。

上述したように、その選択肢のひとつは、「実感宗教」であった。すなわち、実感できる「霊術」を提供する「新々宗教」や、「癒し」や「気づき」、「靈性」などを個人的に求める「スピリチュアリティ」などがそれである。相田みつをの色紙や原宿の路上で求めに応じて「癒しの言葉」を書いてくれる「ヒーラーおじさん」、占いと相談によって若い女性の悩みに答える「新宿の母」なども、これに近似した存在である。

しかし、「神秘」や「不思議」、「癒し」や「気づき」は、宗教団体や特別な場所だけにあるのであろうか。考えてみれば、日常生活のなかにも「不思議」や「気づき」の契機は数多くあるはずである。ただ、「気枯れ」てしまっている現代社会では、それらが発見しにくくなっていることも、また、事実である。だが、その可能性が、「キリギリス」の側の志向性の如何にも大きくかかっているということも間違いない。その意味で、若者たちが、主体的に、日常生活のあちこちに「！」を発見する努力を重ねることが大切であるのではないだろうか。

「キリギリスの悩み」のもうひとつの克服方法は、「豊かな社会」を抜け出して世界の「周辺」地域を見聞してくることである。パリやロンドン、ニューヨークではなく、アジアやアフリカの貧しい地域を見学すると、豊かな日本では発見できなかった「！」や「気づき」が見つかるであろう。「生きる意味」を失った日本の若者たちは、それらの地域の人々から、実に多くのものを学ぶに違いない。

結論的にいえば、自分の「生きる意味」は、本来、どんなに困難で苦しくても、自分自身で探さなければならないものではないのではなかろうか。そして、そのためには、誰しものが、勉強したりお金を稼いだりするほかに、い

気枯れ社会の実感宗教（西山）

くばくかの努力を哲学的な問い（人生の意味探し）に応えるために割かなければならないのではないのであろうか。そして、そのような努力をしないで安易に生き流していると、人生の危機の際に、逆に「アブナイ宗教」などに「ハマ」ることになりかねないのではあるまいか。

私の勤務している東洋大学の創設者の井上円了は、「諸学の基礎は哲学にあり」といって哲学の重要性を強調している。この場合の「哲学」は「人生の生きる意味」と「万象を見る確かな眼」を万人が養う営みを意味している。こうした「哲学」的な営みは、今後、私にも皆さんにもそして誰にも必要であるということができるであろう。

もっとも、私たちは、私たちを「気枯れ」させている現代社会をそのままにしておくこともできない。「ギリギリの悩み」の十全な解決のためには、私たち個々人が「！」の発見に努めるとともに、「！」の発見を妨げている社会的な要因の除去もまた必要である。「近代化」は私たちに物質的な豊かさと便利さをもたらしたが、人生の「意味」や「実感」を与えてはくれなかった。私たちは、これらを自分で積極的に見つけるとともに、「意味」や「実感」を喪失した「気枯れ社会」にも、再度、「意味」を吹き込んでいく必要があるであろう。